

JRRN 設立 10 周年記念

アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN) 及び 日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、2016 年 11 月 9 日（水）に設立 10 周年を迎えました！

～会員皆様へ JRRN 顧問及び理事よりメッセージをお届けします～

2016 年 11 月 9 日（水）、「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」及び「日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)」は設立 10 周年を迎えました。

はじめに ARRN/JRRN 設立前夜の状況から現在までを振り返り、ARRN/JRRN 顧問である玉井信行・東大名誉教授に総括頂いた寄稿文をご紹介します。続いて、アジアの河川再生の知と経験の結節点として ARRN 及び JRRN が担う役割について土屋信行・JRRN 代表理事

より、更には ARRN/JRRN 設立準備段階より現在までネットワークの発展に尽力頂いている 3 名の理事より、設立前後の思い出を含む会員皆様へのメッセージを紹介させていただきます。

日本を含むアジアにおける河川・流域再生ネットワークの設立に至る思いを馳せ、ARRN 及び JRRN の次なる 10 年の新たな挑戦へと繋がるきっかけとなれば幸いです。
【JRRN 事務局】



【思い出の一枚】

「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」設立式典における日本・中国・韓国の登録署名式。（2006 年 11 月 9 日@東京）

ARRN/JRRN の更なる展開を期待する

玉井信行（JRRN・ARRN 顧問／東京大学名誉教授）

はじめに

第3回世界水フォーラムが2003年に京都・滋賀・大阪で開催されたことは、行政を含め日本の水関係者に大きな影響を与えたと言ってよいであろう。中央政府レベルにおいても、水関係のすべての分野の国際化が始まった。

本稿の主題であるアジア河川・流域再生ネットワーク（Asian River Restoration Network, ARRN）と日本河川・流域再生ネットワーク（Japan River Restoration Network, JRRN）との活動も、こうした動向の中で発展、展開してきたと言ってよい。

第3回世界水フォーラムで主要テーマの一つである「水と自然と環境」の中で、国土交通省、環境省、農林水産省、土木学会、応用生態工学会などの後援を得て「適応的流域管理と川の自然復元」セッションが開催され、筆者は実行委員長を務めた¹⁾。こうした関係から、ARRN 結成の前夜から関係してきたので、結成10周年を迎えたことに慶びを感じるとともに、草創記における関係者の努力に深甚な敬意を表したい。

第3回世界水フォーラムへの準備

世界水フォーラムの本会議の準備のためにリバーフロント整備センターが開催してきた国際シンポジウムの記録を辿り、ARRN 設立前夜の状況を考えてみたい。

2002年9月には第3回世界水フォーラム・プレシンポジウムとして「川の自然再生」国際シンポジウムが東京で開かれた¹⁾。主題は、川の蛇行復元と川の流量変動であった。共に局所的な問題ではなく、川の全域に係わる課題であり、当時の日本では、川の基本的な機能復元にはこうした川の全流程に係る地形の多様性や自然の攪乱の復元が重要である、という概念は広まっていなかった。西欧から紹介されたキシミー川、ライン川、マレー・ダーリン川などにおける事業は、世界的な先進事例であった。

2002年11月には河川環境展との併催で、「河川の自然再生と流域・都市」シンポジウムが行われた¹⁾。この時は河川を管理する国土交通省、流域の山林、田地を管理する農林水産省、環境を管理する環境省との連携で行われ、内容も広がりを見せた。

2003年1月のマレーシア会議「河川再生に関する東アジア地域セミナー」は国際協力事業団の後援を得て、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリッピンなど

の途上国と日本、ヨーロッパ連合という先進国の連携を図った。

ARRN への道のり

時系列的に辿れば、2004年度から「水辺・流域再生に関わる国際フォーラム」がリバーフロント整備センターの主催で開始され、これが第4回世界水フォーラムでの国際的連携セッションを産み出した母体となった。年度に一回の頻度で国際シンポジウムが開かれ、筆者が関係したものには次のようなものがある。

水辺・流域再生に係わる国際フォーラムが2005年1月に東京で開催され、大都市での河川再生、先進的ネットワークの関係者が集まった。事例としては、清溪川河川復元、シンガポール川の再生、蘇州河再生、チェサピーク湾再生、マージ川再生、ヨーロッパ河川再生ネットワークであった。



第1回 ARRN 国際フォーラム（2005.1.19@東京）



第2回 ARRN 国際フォーラム（2005.10.27@東京）

2005 年 10 月に開催された水辺・流域再生に係わる国際フォーラムでは、武漢市での長江再生、マニラでのパシグ川再生、エバークレースの再生、米国河川ネットワーク、イタリアの河川再生ネットワークからの講演があった。

第 4 回世界水フォーラムは 2006 年 3 月にメキシコシティで行われ、日・中・韓が「アジアモンsoon地域での川の自然復元」と題するセッションを開催した。その中で、セッションを運営した 3 か国を中心としたアジアにおける川の自然再生に関する永続的な意見交換、技術の集積を担う組織が重要である、という共通認識に達した。



川の自然復元セッション (2006.3.20@メキシコ)

中国、韓国、日本による ARRN 設立記念国際フォーラムが 2006 年 11 月 9 日に東京で開催された。その内容は、設立同意書への署名式、水に関する国際ネットワークの紹介と「アジア河川再生の今後の展開」と題する総合討論であった。総合討論においては中国、韓国、日本、及びマレーシアの河川再生事業の紹介の後、発表者とヨーロッパ河川再生センター代表者の 5 名をパネリストとして迎え、筆者を座長として「アジア河川再生の今後の展開」について討論が行われた。



第 3 回 ARRN 国際フォーラム (2006.11.9@東京)

ARRN と国際学会、国際ネットワークとの連携

前述したように、ARRN 設立に至る過程で多くの国際シンポジウムを開催し、アジア、欧米の河川・流域再生事業に係わる専門家、また、そうした個別の事業を繋ぎ合わせるネットワークの運営責任者との交流が進められてきた。ARRN の初代会長に選出された筆者が考えたことは、個人を通じた技術交流を深めると共に、組織単位の連携を目指すことが持続的な交流にとってより重要ではないか、ということであった。

ARRN 活動の初期段階には、筆者は International Association for Hydro-Environment Engineering and Research (国際水圏環境工学会、略称 IAHR) の副会長、会長の時期であったので、先ず、IAHR との連携を考えて行動していた。IAHR の専門家に日本で話をしてもらいたいと考えていた中から実現したのは、ARRN/IAHR Joint Seminar on Ecohydraulics and Environmental Hydraulics であった。このセミナーは IAHR の理事会が名古屋で開催された折をとらえ、共に副会長であった Profs. Peter Goodwin と Joseph Lee を迎えて 2008 年 9 月に東京で開催された²⁾。IAHR の役員が日本の河川生態、環境水理関係者を知り、日本の研究者・技術者が IAHR の先端的な情報に接することを期待した企画であり、双方にとって有益な結果が得られたと考えている。



ARRN 河川環境講演会 (2008.9.16@東京)

次の例は、2010 年 9 月にソウルで行われた IAHR 第 8 回生態水理(eco-hydraulics)国際シンポジウム (8th ISE) において、特別セッションに応募し ARRN 円卓会議を開催した。主題は「ネットワークを通じて河川再生技術とその指針をどう発展させるか」であった³⁾。この企画では、国際集会で公開のセッションを行い、本会議に参加する専門家も円卓会議に出席することを期待したのである。

議題は、円卓会議と同様に 8th ISE の特別セッショ

ンとして開催された第7回 ARR N 国際フォーラムの論評, ARR N の河川再生技術指針, 河川再生ネットワークの役割, の3つであった。ヨーロッパ河川再生センター会長の Dr. B. Fokkens が 8th ISE に出席するという機会をとらえることが出来たので, ARR N 国際フォーラム, ARR N 円卓会議の両者に講演者, パネリストとして登壇を依頼し, 幅広い経験と深い見識に接することが出来て, IAHR 8th ISE との連携は実りあるものとなった。



アジアの河川再生技術共有に向けた円卓会議
(2010.9.14@ソウル)

次いで, ARR N 事務局が中国へ移動した後の 2013 年における活動例に触れておきたい。ARR N, China は事務局を中国水利水電科学研究院 (略称 IWHR) に置いている。IAHR のアジア太平洋地域部会の事務局も近年は IWHR が引受けており連絡は密なので, この時も 2013 年に成都で行われた IAHR 世界大会と連携し, 第 10 回 ARR N 国際フォーラムを IAHR 世界大会の特別セッションとして開催した⁴⁾。



第 10 回 ARR N 国際フォーラム (2013.9.10@成都)

ARR N の憲章では国会員(National Member) は一国に一つと定められている。しかし, 台湾においては河川・流域再生事業も盛んであり, 技術的には日本と

の交流も盛んである。この, いわゆる台湾問題は ARR N が会員を増やしたいと願う時の難問題であった。TRRN (台中河川・流域再生ネットワーク) は 2008 年に設立以来, JRRN と事務局間で継続的に情報共有や様々な相互協力を進めていたので, 2012 年 12 月に地域ネットワーク(Regional Network)という会員資格で ARR N に加入することとなり, 国家問題は一段落した。

JRRN の活動－小さな自然再生を中心として

JRRN は ARR N と時を同じくして, 2006 年 11 月に設立された。そして, シンポジウムの開催, 国内外の事例の集積, 技術指針の検討など, 研究と実務との橋渡しに寄与するために精力的に活動が続けてきた。2012 (平成 24) 年応用生態工学会全国大会で開催された研究集会「小さな自然再生が中小河川を救う」に出席して, ARR N, JRRN の資料の中には「小さな自然再生」の事例がほとんど含まれていないことに気付く, 筆者は愕然とした記憶がある。

この経験に基づいて JRRN の関係者に働きかけ, 活動を釣合い良く進めることを提案した。また, 応用生態工学会との連携を深めるように努力をしてきた。こうした呼びかけに呼応して, JRRN と小さな自然再生実施グループの皆さんとの協力で「小さな自然再生」事例編集委員会が成立し, 筆者も監修者として参加して, (公財)河川財団河川整備基金の助成を得て 2015 年 3 月に「できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集」⁵⁾ が JRRN から発行されたことは大変うれしいことであった。



水辺の小さな自然再生事例集(2015.3 発行)

これ以後「小さな自然再生現地研修会」⁵⁾ が各地で開催されるようになった。このような活動を通して, 小さな自然再生、河川管理者が行う大きな自然再生、地域づくりの新しい連携が始まり、相互に刺激し合いながら更に発展して行くことが期待される。

最近、巨大災害が発生する一方、それを人間の力だけで防御することは費用が莫大となるだけでなく、予算の賢明な使い方に相応しいか、という議論が起きている。防災と環境を同時に考えようとする国際シンポジウムが、世界工学会議の関連行事として 2015 年 11 月に京都で行われた。「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウムは JRRN と第 9 回災害関連ジョイント国際シンポジウムとの併催であり、「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」実行委員会が企画・実行に当たった。筆者は実行委員長を務め、セッション 1「河川・水域の防災に関するイノベーション」の 5 講演、セッション 2「環境・水利用に関するイノベーション」の 5 講演、及びセッション 3「総合討論」の運営にあたった。講演録⁶⁾は 2016 年 3 月に発行されている。



国際シンポジウム「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」(2015.11.28@京都)

まとめ

1997 年の河川法の改正に示されるように、河川環境の課題は河川管理の中では「後発の課題」であった。その分野での具体的な事業である河川・流域再生の学術・技術は、20 年の時を経て、応用生態工学会の成立、小さな自然再生における市民参加など、発展を遂げ、社会に定着して来つつある。その中で、新しい概念の普及、発展にネットワークが果たした役割は大きなものがある。

将来に向けての課題は、河川環境の課題は「後発のままではよいのだろうか」という問いである。温暖化による災害の巨大化が心配される中で、被害を軽減し、人命を守るためには地形、生態系などの自然が持つ潜在能力をより生かす知恵が求められていると考える。地域や国際的なネットワークを通しての連携は、益々重要になることをこの小文のまとめとしたい。

おわりに

ARRN/JRRN のホームページでは、活動成果（ニュースメール（毎週）、ニュースレター（月刊）、刊行物、行事報告、データベース、年次報告書（ARRN では一部表現が異なる））と河川再生事例（国内、国際）が設立以来のアーカイブとしてまとめられており、利用できる。

ARRN 事務局は中国、韓国と順を追って移動したが、ホームページの管理は一貫して（公財）リバーフロント研究所及び（株）建設技術研究所国土文化研究所で行なわれており、設立 10 周年を迎えるにあたって、事務局関係者の努力による ARRN/JRRN の成果の取りまとめ、公開が、河川再生、流域管理に関心を持つ技術者、研究者、市民に大きな貢献をしていることを改めて思い出している。

参考文献

- 1) 玉井信行：「適応的流域管理と川の自然復元」セッションについて、特集・第 3 回世界水フォーラムセッションの紹介－自然環境－、雑誌河川 12 月号、pp.34-37、2002.
- 2) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/39>
- 3) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/97>
- 4) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/234>
- 5) <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/567.html>
- 6) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/169>

JRRN 設立 10 年を迎えて

土屋信行（JRRN 代表理事／公益財団法人リバーフロント研究所）

JRRN が発足して 10 年の節目を迎えました。個人会員数は 750 人を超えるまでになり、日本全国で会員皆様が様々な活動をそれぞれ工夫しながら取り組まれています。

また、日本国内の活動に加えて海外の方々との繋がりも拡がり、名実共にアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)としてアジア地域の情報結節点としての役割を確立しつつあります。

ARRN は、メンバーである中国、韓国、台湾、マレーシア、オーストラリア、タイ、パキスタン、インド、などに加え、香港、モンゴル、イラン、インドネシア、ベトナムなどとも繋がっています。更に、情報共有地域として欧州やイギリスなどとも連携を深めてきました。それぞれの国・地域柄もあり日本国内の活動とは異なる条件も多い中で、相互の連携構築の努力を続けております。

一例として、間もなく仲間に加わるイランの活動を紹介させていただきます。イランというと砂漠の国という印象を持たれる方も多いと思いますが、テヘランは緑豊かな公園都市として美しい景観を作り上げています。降雨量は年間 500 ミリ程度と日本に比べれば非常に少ないものの、この雨水を有効に使う術を紀元前から

営々と続けて来ました。イランは雨季と乾季が明確な地域にあり、普通に考えれば、このような地域には文明は生まれないように思えます。しかし、ここに建設されたのがペルシャ帝国であり、ペルシャといえば正倉院の御物にあるガラス器や琵琶がシルクロードを通じてやって来たことでも有名です。また、[コタツ] もその起源はペルシャだと言われています。

このイランの中心都市であるテヘランは、4000 メートルを越える山々に降った雪解け水を都市まで運ぶ運河を造り上げました。それが有名な地下トンネル運河[カナート]です。このカナートにより運ばれた大切な水を一滴も無駄にしないように管理し、直径 1 メートルにもなる街路樹を育て緑溢れる公園を整備しています。テヘランではカナートで運ばれた水が地表面流となって川を形成しており、このテヘランでの河川再生の課題は、都市化の進展による川の汚染であり、人口の集中と河川の問題は各国共通の課題でもあります。

ARRN、またその日本窓口を担う JRRN を通じて、これからもアジア各国が持てる知識と経験を共有し、すべての国・地域が豊かな河川環境を実現できる様に協力していきたいと考えています。

JRRN と私

佐合純造（JRRN 理事／株式会社徳倉建設）

JRRN 設立 10 周年、おめでとうございます。JRRN の設立は平成 18 年（2006 年）11 月ですが、JRRN と私の関わりは、平成 17 年（2005 年）8 月からです。このとき、私はリバーフロント整備センター（現リバーフロント研究所）に勤務することになり、最初の仕事が半年後に控えた第 4 回世界水フォーラム（2006 年 3 月メキシコで開催）の中で行う日中韓共同開催の「河川再生分科会」のお手伝いでした。

半年の準備期間は紆余曲折いろいろありましたが、分科会はなんとか無事終了しました。この際、分科会

の成果は、「日中韓で河川再生に関する知識・技術情報の交換と人材交流を積極的に進める」という 3 カ国の共同提言でした。しかし、具体的に誰がどのように行っていくのかが明らかでなかったため、国内関係者や 3 カ国で半年ほど議論がなされて、結局、3 カ国で ARRN という連携組織をつくる、そして、各々の国内体制を整えるため、RRN（日本は JRRN）を設立することで一致しました。設立のいきさつが長くなりましたが、要はその後 6 年余の私のリバフ口時代を通して JRRN は切ってはきれないものになりました。

JRRN は ARRN との対応だけでなく、国内での会員募集、様々なイベントの開催や協力、海外からの訪問者サポート、国内向けの情報発信など積極的な活動を行っています。事務局長だった私は途中で抜けてしまいましたが、現在までの事務局の皆さんのご努力に敬意を表する次第です。

私自身、いまは仕事の上では JRRN の活動とはまったく無関係になってしまいましたが、いつも送られてくる会員向けのニュースメール、ニュースレターは新鮮な内容で興味深く読ませていただいて、いろいろな

場での話題のネタに使っています。また、毎年、企画されている「桜のある水辺風景」の募集も楽しみにしています。

最後になりますが、事務局を抜けた立場でえらうなことは言えませんが、今後とも JRRN の活動を有意義かつ長続きさせるためには、当初の目的を見失うことなく、他の組織ではできないこと、やっていないことを地道に行っていくことが大切と思っています。

JRRN の 10 周年に思うこと

白川直樹 (JRRN 理事 / ARRN 技術委員 / 筑波大学)

ARRN および JRRN の設立から 10 年が経ちました。2003 年に京都・大阪・滋賀で開催された第 3 回世界水フォーラムの前頃からの熱気を思い出します。アジアモンスーン地域の川の特徴、自然再生と河川文化への渴望、住民と行政の関係性、国際情報交流の意義など、いくつかの背景をもって始まった活動だと思っています。

この 10 年、JRRN と ARRN は着実に活動成果を積み上げてくることができました。ご参加されている個人と団体の会員がネットワークの最大の財産です。他にもご協力いただいている皆様に支えられています。人と並んで重要な要素が技術であり、現場の川と水辺そのものです。人は社会の主人公であると同時に、水辺を引き立てる脇役でもあるかもしれません。

河川再生は都市中心部、郊外域、田園地域、山間部のそれぞれに異なった発展をみせているように思います。地形や一部の生物のように普遍性の高いものから

地域固有種や歴史といった特殊性の高いものまで渾然となつて分かちがたく存在する川という場をどのように扱うか、その方法は手探りながら進歩しています。単に一種類の生き物を大切にするだけでもなければ経済効率一辺倒でもなく、生物群集だけでもなければ歴史や文化だけでもない、自然と人間が向き合う川の在り方がこれからも追求されていくものと考えています。

日本、韓国、中国の 3 ヶ国にてスタートした ARRN も、他の国々との交流が広がっています。事務局は 3 ヶ国を一回りしました。事例も技術も情報交流も、アジアの川づくりはまだまだこれからです。

最後に、全国や海外を飛び回って幅広い活動をまとめ、前進させてくださっている JRRN 事務局に最大の敬意を表します。今後も日本とアジアの水辺が豊かで潤いにあふれた場所でありますように。

JRRN10 周年によせて

伊藤一正（JRRN 理事／ARRN 情報委員／株式会社建設技術研究所）

2003 年 3 月 16 日～23 日にかけて、京都を中心に開催された第 3 回世界水フォーラムにおいて、河川環境の国際的なネットワーク設立の重要性が提案され、2006 年のメキシコでの第 4 回世界水フォーラムでアジアの河川再生ネットワークの設立が提案され、そして、2006 年 11 月 9 日にアジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）が設立されました。

このアジア河川・流域再生ネットワークには、日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）、韓国河川・流域再生ネットワーク（KRRN）、中国河川・流域再生ネットワーク（CRRN）の 3 団体も同時に組織され、情報交流の活動が開始されました。JRRN は 2016 年 10 月 31 日時点で、団体会員 60 組織、個人会員 750 人へと大きな発展を示しております。当初は、河川環境再生や自然再生の情報を如何に国内外に流通させることが出来るかと、関係者で連日連夜議論をしていたことから考えると、会員数の拡大は大きな達成感となっております。

設立から 10 年を経過し、その間の情報発信は他に類を見ない、独自性があり、新規性があり、メンバー諸氏に大いに役立つことが叶っているかと思えます。会員の皆様、事務局の皆様方の日々の努力の集大成と思えます。また、海外の国や機関からも参加希望が出ており、日本が培った技術や経験が、まさに国境を越えて、国際的に求められている事も実感しております。

このネットワークの大きな特徴としまして、僅かばかりではありますが組織の支援が入っておりますが、まったくの有志で運営されている事、自分たちの経験を情報として共有してゆく事、いわば、経験の自慢を出来る場所として共有されている事に、その良さが集約されています。当初は、国内外の様々な事例を集めて、その新規性や独自性などを引き出して、他のプロジェクトの参考にできればと、紙面やWEBでの発信をしておりましたが、いつしか定期ニュースが流れ、毎年の活動報告がなされ、また、技術レポートまでも発刊されるに至っては、もはや有志連合をはるかに超えて、組織的な活動に変貌してきております。設立当初には考えられもしなかった体制になりました。

日・中・韓を結ぶ河川技術のネットワークを担うJRRN、3 国間で、いくばくかの政治的な軋轢もありますが、技術の分野では、各国の経験の共有を強く求め

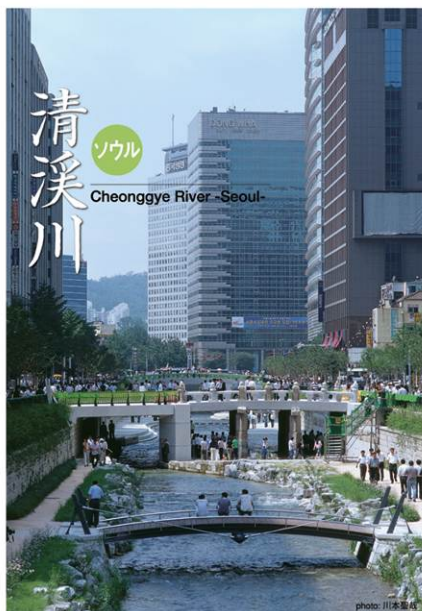
あい、密度の濃い連携がなされています。このネットワークの成果のひとつともいえるでしょう。過去には、多くの情報交換の仕組みが出来てはいましたが、10 年にもわたる継続は、特筆されるものと言えます。既に私たちは、日本での多くの取組の事を知りえると共に、中国での取組や韓国での取組にも触れる事が出来ます。さらには、台湾、マレーシアなどもメンバーに加わり、さらには中東の国からもオファーが出てくるなど、そのネットワークはさらなる拡大を続けてきております。

理事の一人として、このネットワークの運営に関わり、組織運営の在り方、組織拡大の仕組みづくりなど多くの事を学ばせていただきました。少ない予算で、いかにして会員に魅力を感じていただける情報発信が出来るか、かつ、会員の意見を海外に伝える仕組みが作れるか、課題は大きかったですが、現実になってきている事を思うと、この 10 年は有意義な期間であったことが分かります。

10 年前に比べ、情報発信の仕組みや情報共有の仕組み、また、国際的な情報共有・伝達のスピード変化が多々あります。新しい仕組み・ツールや新しい組織・人材との連携が、これまでのネットワークでの共有に新しい風を吹き込んでくれることにもなるかと思えます。

アジアで始まった河川・流域再生ネットワーク、次の 10 年でさらなる情報交換を進め、国際的な新しい情報や技術を各国が共通に獲得でき、自身の技術として取り込んで、さらなる発展につながる事を願います。これも、会員の皆様の情報発信・共有に対する願い、事務局の多大な努力によることであり、その努力に大いに感謝いたします。

新しい河川再生・環境情報の交流交換の場の、さらなる発展と、次の 10 年のチャレンジを期待しております。



覆蓋道路のオープン化と高架道路の撤去で有名な清溪川は、ソウル特別市の歴史や文化を象徴する都市のシンボルとして再生されました。

The Cheonggye River has been restored as the symbol of the Seoul Metropolitan City's history and culture through the removing of paved roads and overpass above the river.

アジアのムーブメント

もう始まっている



人々の生活に密接な黄浦江は、親水性の向上・修景等によって、都市生活に潤いのある河川に再生されました。

The Huangpu River, closely linked to the people's lives, has been restored to enrich their urban life through the water-friendly improvement and landscaping.



多自然工法が施された川では、水の流れ、水深、底質等、変化に富んだ水際線が蘇り、豊かな自然環境が創出されました。

In a river reconstructed with the Nature Oriented River Works, a rich natural environment has been newly created through the restoration of diversified waterside line consisting of water flow, water depth, and bottom characteristics.



【思い出のパネル】

「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」設立式典の会場に飾られた展示パネル。(2006年11月9日@東京)

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財) リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@arrn.net

URL: <http://www.arrn.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

